

## 第 2 部 手引きの概要・ポイント

※第 2 部については、有識者からのコメント以外、委託団体の皆様からご執筆いただきました。



# 能代市教育委員会

## 有識者からのコメント

能代市教育委員会では「つなぐ」をキーワードに、3校がカリキュラム・マネジメントの三つの側面を中心に取り組んできました。能代市立第四小学校（二つ目の側面）は「**教育目標と日常をつなぐ**」として、全教職員による資質・能力の設定、その育成を目指す年間指導計画の作成と授業づくり、授業研究会の工夫等が一貫して行われています。能代市立能代第二中学校（一つ目の側面）は「**教科の壁を超えてつなぐ**」として、事前研究会からの教科を越えた教師による授業づくりと事後研究会の過程を具体的に紹介しています。能代市立二ツ井中学校（三つ目の側面）は「**学校と地域をつなぐ**」として、生徒会を中心に地域創生に取り組む「きみまちカンパニー」の活動の足跡を詳細に示しています。手引き作成がゴールではなくスタートと考え、作成後の令和5年度以降、3年計画で全市的に取り組んでいることも参考になるでしょう。

（村川 雅弘）

## 手引きの概要

手引きは次のような構成となっている。

### 第1章「カリキュラム・マネジメント」概論

- ・第1節 カリキュラム・マネジメントの概要
- ・第2節 カリキュラム・マネジメント推進のポイント
- ・第3節 本研究に関する本市の実態
- ・第4節 教職員のカリキュラム・マネジメントマインドを高めるために

### 第2章カリキュラム・マネジメントの実践例

- ・第1節 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点等）の設定及び実現に向けた取組  
～能代市立第四小学校～
- ・第2節 学校の基盤となる資質・能力の育成に向けた取組  
～能代市立能代第二中学校～

- ・第3節 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた取組  
～能代市立二ツ井中学校～

### 第3章研究の成果と課題

- ・第1節 市としての成果と課題
- ・第2節 カリキュラム・マネジメント Q&A
- ・第3節 カリキュラム・マネジメント3か年計画について

手引きには、実践校の研究会等の動画を視聴することができる二次元コードを掲載するとともに、実践校以外の学校が、カリキュラム・マネジメントへの理解と実践への意欲が高まるよう、「カリキュラム・マネジメント Q&A」を掲載している。また、目次に「知りたい情報はここに」を掲載し、読者が知りたい情報を検索しやすいよう工夫している。

## 実践校における取組：能代市立第四小学校・能代市立二ツ井中学校

全教職員が学校経営に参画する  
カリキュラム・マネジメントの推進

～児童生徒の資質・能力の育成を目指して～

## 教職員の学校経営への参画意識向上

育てたい資質・能力の明確化      学びのセルフマネジメント  
自分事としての授業研究会      地域との連携・協働の充実

## 取組の目的

次年度から、本市全小・中学校でカリキュラム・マネジメント三カ年計画がスタートします。そのため、教職員一人一人が、カリキュラム・マネジメントについて自分の言葉で語ることが重要です。カリキュラム・マネジメントをより分かりやすくすると、次のように言い換えることができます。



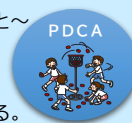
各校が子どもたちの地域の実情等を踏まえて、**学校教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと**



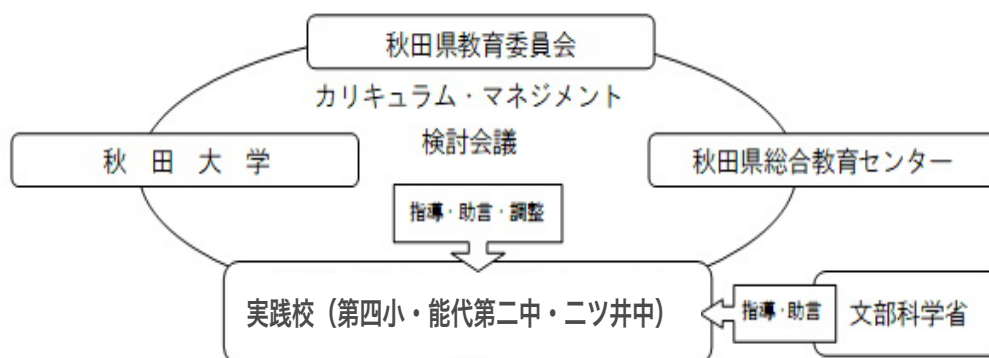
つまり、学校経営目標達成に向けて、全教職員が学校経営に参画意識をもち、児童生徒の資質・能力を育成していくことが大切です。

～カリキュラム・マネジメントをスタートするにあたり、学校・教職員が準備・意識しなければならないこと～

- 学校教育目標が言える。
- 学校教育目標達成のために、育成すべき資質・能力を全教職員で洗い出し、児童生徒にも分かるように可視化する。
- 育成すべき資質・能力をどの教科のどの単元で行うか「重点化」と「関連化」を図り、学年毎の単元配列表を作成する。  
※今まで各校で行ってきた特色ある「キャリア教育」「防災教育」「ESD教育」等を核とした、教科横断的な視点を取り入れると、カリキュラム・マネジメントが機能しやすい。
- 育成すべき資質・能力を、各指導部、学年経営目標、学級経営目標に反映させ、教職員一人一人が年間を通して意図的・計画的に、児童生徒の資質の能力の育成について意識付けを図ることができるよう、PDCAサイクルを確立する。
- それぞれの学校行事等は、どのような資質・能力を育てるのかについて説明できる。



## 取組の概要



## 能代市教育委員会による学校支援の取組

- ・実践校が、教育委員会等と連携しながら実践を推進
- ・実践校の取組を市内の学校に周知
- ・全ての学校でカリキュラム・マネジメント3か年計画をスタート

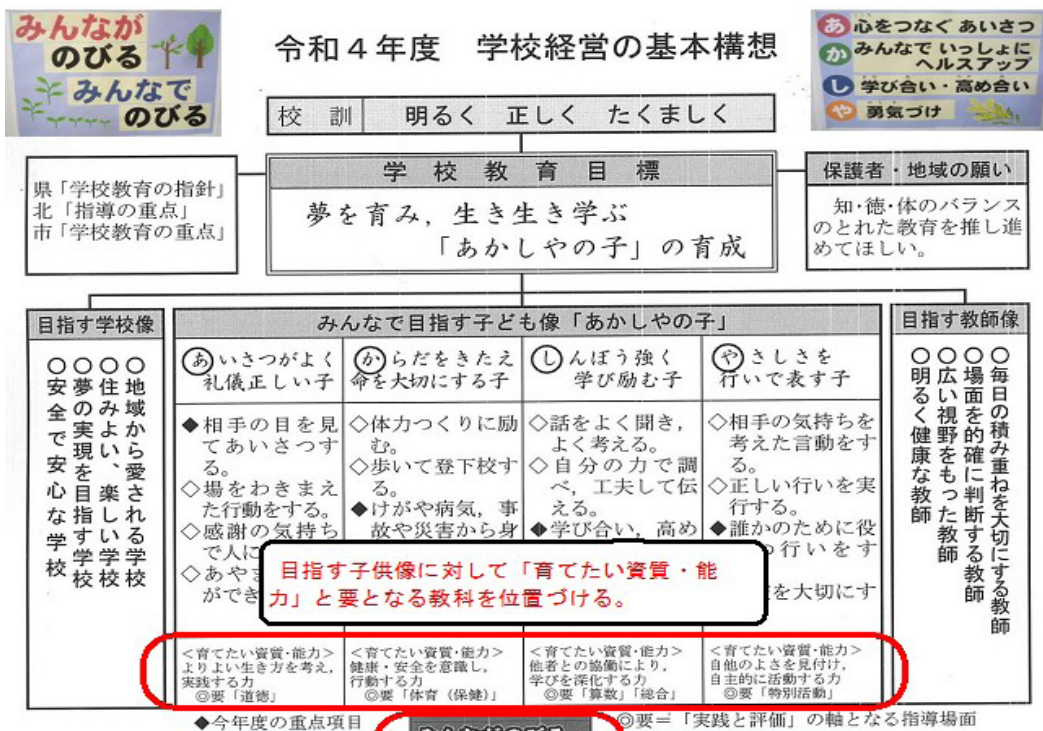
# 能代市立第四小学校での取組

学校経営目標の具現化を目指し、目指す児童像から「育てたい資質・能力」を設定し、前年度の反省を踏まえて重点項目を示している。各主任が、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させ、具体を進めることができた。また、次年度の構想に当たっては、目指す児童像につながる「育てたい資質・能力」の内容・文言の見直しと児童等に示すキーワード(手立て)の

設定を学校評価に合わせ全教職員で行ったことで、教職員の参画意識が一層高まった。

この他にも、「あきた型学校評価」を基盤として、教職員による自己評価や保護者アンケート、児童による「四小学びのアンケート」等を実施し、その結果を踏まえた年度中の成果や課題を共有し、改善等を行うなどして、一連のPDCAサイクルを構築することができた。

【学校経営の基本構想 ～ビジョンの共有～】



★今年度の合い言葉

みんながのびる みんなでのびる

経営の重点

経営の重点の中にキーワードを示す

- 生徒指導の充実
  - 児童にとって、「心の居場所となる学校」「絆づくりの場となる学校」を
    - ◇具体◇ **キーワード「勇気付け」**＝「一人一人が元気で、勇気付ける友達・先生がいる」学校
      - ①温かな相互評価(教師・友だちに認められる場の設定) ②適切な自己評価(めあて・振り返りへの指導)
      - ③学級活動や児童会活動・学校行事等で、自己有用感を高める活動・振り返りを継続する。
  - ・「生活安全」「交通安全」「災害安全」に係る指導を計画的に行い、「適切な判断・行動」を育てる。
  - ・関係機関等との連携により児童の状況を把握し、いじめ・不登校等の未然防止・即時対応に努める。
- 学力の向上
  - 分かる、できる、楽しい授業を構築する
    - ◇具体◇ **キーワード「学び合い・高め合い」**＝「構想と準備、児童相互の対話が光る」授業
      - ①探求型授業の基本ステップと意識した授業・コメント ②授業を見合う会等のチーム研究の取組
      - ③「比較・検討」に係る教科等横断的な指導の充実 ※「発表・話し合い」の成果への気付き
    - ・児童が安心して学習できる(間違いを大切にす)望ましい集団づくり)に努める。
    - ・算教科・総合的な学習の時間を軸に協働的な学びの充実を図る。～教員の資質向上に係る重点①～
  - 体力の向上、心身の健康の保持・増進
    - ◇具体◇ **キーワード** **みんな一緒に「ヘルス・アップ」**
      - ①体力づくり(アスリート・など)の継続
      - ②メディア・コントロールに係る指導・啓発
    - ・望ましい運動習慣を確立し、体力の向上を図る。
    - ・家庭等と連携し、基本的な生活習慣の改善に努める。
- 特別支援教育の推進
  - ・児童の実態を把握し、特別な支援を必要とする児童への指導方法を工夫する。
  - ・特別支援教育について、全教員で研修を進める。～教員の資質向上に係る重点②～
- ふるさと教育・キャリア教育の推進
  - ・豊かな体験活動等を通して、自立的に生きるための基礎(社会性、自主性、意欲等)を育成する。
- 地域人材 施設、関係機関、ボランティア等 特別支援学校との連携を図り、教育活動の充実を図る。
  - ◇具体◇ **キーワード 心をつなぐ「あいきつ」**＝「あいきつと健康・学びで繋がる」学校と地域
    - ①幼・保・小連携(交流活動等の実施) ②小・中連携(合同授業等の実施) ③地域素材・人材の活用
    - ④域学校協働活動として、あいきつ運動を継続し、健康づくり活動を計画・実行する。

## 能代市立二ツ井中学校での取組

年間指導計画を作成・活用することで、教科等横断的な視点で授業をつくらうとする意識が高まり、授業改善につながった。このことで、教師も生徒も各教科等における関連を見いだしたり、課題や学習内容に多面的・多角的・総合的にアプローチしたりするようになった。そして、生徒が学びのつながりを意識したことにより、知の総合化が起り始めた。

このような授業改善が、生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現につながり、知識及び技能に留まらず、思考力・判断力・表現力を育むことができると考えている。また、教職員だけでなく生徒と共にPDCAサイクルを確立し、「きみまちカンパニー」が目指す姿や本校の生

徒に身に付けたい力の育成につながっているかを、常に確かめながら教育活動を進めることができた。「きみまちカンパニー」を通して、地域の人的・物的資源の豊かさや学校教育に対する熱意を感じた。



## 成果と課題

- 学校の教育目標の具現化を目指し、目指す児童生徒像から「育てたい資質・能力」を設定し、学年部や指導部の経営案に重点項目を反映させることで、学校経営における教職員の参画意識が一層高まった。
- 学校の教育目標を実現するために、地域と連携・協働することで、地域に対する児童生徒の熱い思いや、高い志の育成につながっていくということを実感できた。
- 授業研究会が、「自分事研究会」へと大きく進化し「全員で授業づくり」に取り組むことができた。
- 実践を踏まえ、修正した年間指導計画を次年度活用することで、更なる教科等横断的な視点での授業や、様々な活動を計画的に実施していく必要がある。
- 確立したPDCAサイクルを機能させながら、持続可能な活動を目指して、更に検証・改善を図る必要がある。

- 今後も、教職員一人一人が、自校の教育課程について語る事ができる学校づくりを通して、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していく必要がある。

実践校の課題を踏まえ、今年度より以下のような内容でカリキュラム・マネジメント3か年計画がスタートした。

令和5年5月に開催された能代市教務・研究主任会において、手引きを持参し、実践校のカリキュラム・マネジメントを学ぶとともに、「単元配列表」の作成と活用について研修した。

年度	内容
令和5年度（1年目）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全教科等の指導案に育てたい資質・能力及び関連する単元等を明記</li> <li>・令和4年度に実践校が作成した単元配列表を基に、各校全学年において単元配列表を作成</li> </ul>
令和6年度（2年目）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教務・研究主任会において、単元配列表を持ち寄り、加除・修正を実施（単元配列表のPDCA）</li> </ul>
令和7年度（3年目）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全教職員が学校教育目標のグランドデザインづくりに参画</li> <li>・育てたい資質・能力に沿って学年部及び各教科等の重点を設定</li> <li>・全教育活動においてPDCAサイクルの確立</li> <li>・校長会・教頭会において、カリキュラム・マネジメントについての協議の場を設置</li> </ul>



# 棚倉町教育委員会

## 有識者からのコメント

棚倉町教育委員会では、かねて町の学校全体でキャリア教育を進めており、**キャリア教育で目指す資質・能力を育成**する観点からカリキュラム・マネジメントに取り組んできました。手引きでは、**実践をもとに、カリキュラム・マネジメントの八つの手法（資質・能力を「見える化」**し子供に意識させること、ほめるポイントを具体化すること、自分で決める自己マネジメント力を高めること、**子供の学びの姿で成果を共有し発信すること**など）を提案しています。小学校3校での具体的な実践の様子も、豊富な図や写真、様々なツールや子供の記述例など添えて分かりやすく示されており、全国の学校がカリキュラム・マネジメントのイメージをもち、取り組み方の工夫を考える上で有効な手掛かりになると思われます。

（吉富 芳正）

## 手引きの概要

### 手引きの作成意図

手引きには、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントに取り組んだ成果を八つの手法にまとめた。資質・能力を育成するために必要な取組を教育課程の編成から改善に至るまで実践レベルで構成し、本町の教職員全てが日常的に活用できるよう配慮した。

### 手引きの構成

八つの手法については、次のとおり。

- 1 **意識化**・・・育てたい資質・能力は、子供に意識させ、校種をつないで育成する。
- 2 **具体化**・・・具体化した「ほめポイント」を基に教科等横断的に資質・能力を育成する。取組の本質は、些細なことでも教育活動全体を通して、関連して称賛することである。
- 3 **対話で育む**・・・「ほめポイント」を基に、教師が対話的・肯定的に関わる。大切なことは、対話を通して、否定することなく、肯定感や有用感を高めることである。
- 4 **自分で決める**・・・発達段階や教科の特性に応じて、自分で決める経験を積み重ねる。振り返りをもとに、自分を知り、目標を立て、

計画を立てることを重視し、自分で決めるように見通しをもつことが大切である。

- 5 **評価サイクル**・・・四半期（3か月）ごとに、資質・能力を評価する。
- 6 **レバレッジポイント**・・・「子供の学びの姿」で保護者や地域と共有する。カリキュラム・マネジメントにおいて、「子供の学びの姿」で成果を発信し共有すれば、教育課程の編成、実施、評価、改善の全てに良い影響を与える。
- 7 **個人シート**・・・各種調査等の結果をつながりの中で活用し、多面的に個を捉える。子供のよさや成長はつながっている。そのつながりを把握する。
- 8 **共有化**・・・「子供の学びの姿」をあらゆる機会を用いて共有し、資質・能力の向上につながる。子供の学びの姿を「日常の指導」「三者面談」「通知表の所見」「指導要録の記入」などあらゆる機会に活用することで、教師の負担軽減にもつながる。

これらの八つの手法には、全て「キャリア・パスポート」が重要な役目を果たしている。それらを用いて「教科等横断的な視点」「PDCA

サイクルの確立」「人的・物的資源の活用」の三つの局面からアプローチすることで、資質・能力が育成できる。

### 手引きの活用

本町の教職員全てに配付し、自校の実態に合わせて取り組んでいただいている。

活用のポイントは、八つの手法を忠実に実施することではなく、学校の実態に応じて取組の本質を押さえて実践することである。

例えば、「1意識化」の本質は、「子供の過去

も現在も大切にして、子供に身に付けさせたい力を設定し、意識させること」である。「どんな力を付けるのか」ということを子供が意識しないと資質・能力は向上しない。

資質・能力の向上は、その意味で教師と子供の相互作用による協働作業なのである。

さらに、「4評価サイクル」は、2学期制や四半期制を実施することではなく、その本質は「資質・能力の評価・指導は、学期と切り離して行うことが可能である」ということである。

## 棚倉町教育委員会による学校支援の取組

### ○キャリア教育を推進するためのリーフレットの作成と配付

人事異動で新たに本町に赴任した教職員に向けて、棚倉町の10年間のキャリア教育の実践をもとに、「初めて棚倉町でキャリア教育を推進する皆さんへ」というリーフレットを作成した。

これは、キャリア教育の本質を「つなぐ」「自分で決める」「対話による肯定感と有用感の育成」「課題解決型の体験活動」「肯定的な関わり」の観点から授業実践に即して分かりやすく解説したものである。

### ○校長・園長研修会の実施

キャリア教育をより深く理解していただくために、町立小中学校長、町立幼稚園長を対象とした研修会を年に10回実施している。講話の内容によっては、各校園教頭や研修主任など希望する教師もオンラインで聴講できるようにしている。

### ○キャリア教育シンポジウムの実施

夏季休業中に町内全ての教職員を対象として、キャリア教育シンポジウムを実施し、各学校の取組について講師による指導・助言を受けることができるようにしている。

### ○学力向上推進委員会各部会の実施

キャリア教育と学力向上を一体的に捉え、「キャリア教育推進(各校教頭)」「探究学習づくり(各校総合的な学習の時間主任)」「学びの基盤づくり(各校研修主任)」「ICT推進(各校情報担当主任)」の4部会をオンラインで定期的に開催している。

令和5年度版リーフレット

棚倉町で初めて  
キャリア教育  
を推進する皆さんへ

棚倉町のキャリア教育をご理解いただけるように  
実践事項を解説しました。  
キャリア教育の本質は、極めて分かりやすく  
まとめると、以下の5点に集約されます

1 今の学びを将来につなぐとともに、保育園から高等学校まで学習継続する中で社会的・職業的自立のための資質・能力を育成する教育です。	2 人生のすべてに振る舞いがあり、「自分は社会の中でどんな役割を果たし、どう生きていくか」を、日常的に自問自答(自分で考え決め)させていく教育です。
3 自己の肯定感と有用感、他者との対話で得られるものであるため、教師、保護者、地域社会の人々が対話的に関わる必要がある教育です。	4 自己のキャリア形成には、体験が不可欠であるので、課題解決型の体験活動を通して自己マネジメントサイクル(RVPDCA)を意識させ活用させる教育です。
5 人間は、今までの自分を基にこれからの自分を社会的に構成していく存在であると見なし、他者が肯定的に関わることが必要な教育です。	

社会的・職業的自立に向けて必要な基礎となる資質や能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の実施を図ると  
【学習指導要領1章第4の1の(3)】

棚倉町教育委員会

現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究  
棚倉小学校

育てたい資質・能力を「ほめポイント」の4つの化(見える化、共有化、意識化、強化)と四半期ごとにPDCAサイクルを回して資質・能力を育成することを連動させて指導した。そして、「キャリア・パスポート」や学習計画表において「ほめポイント」をもとにした対話的な関わりを推進し、児童と教師だけでなく、家庭や地域との共有も進められた。

これらのことにより、児童のキャリアの4能力、そして学力の向上につながった。また、カリキュラム・マネジメントの視点で四半期ごとにPDCAサイクルを回すことから、「キャリア・パスポート」の通知表へのリンクによる教職員の多忙化解消に取り組み、働き方改革につながった。

ほめポイント(育てたい資質・能力)の4つの「化」

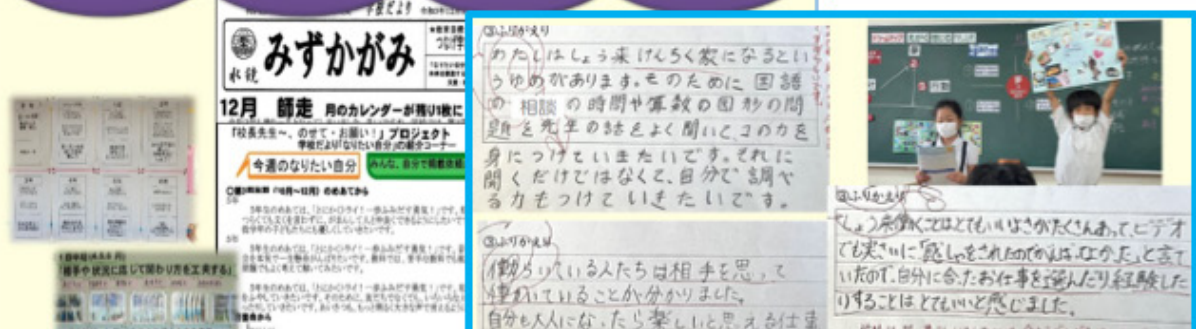
見える化

共有化

意識化

強化

日常の実践を子どもの姿で指導要録記入までつなぐ。



2 児童の学びの姿 ～6学年 第2四半期の取組～

自己理解・自己管理能力  
実践を生かし、困難な課題に対しても、自己管理することができる

四半期の  
はじめ

学年テーマ	発揮しよう！自分の力！		
月	7	8	9
行事		修学旅行	チャレキッズ
学習づくり	ルールのお守り(学習管理) 1年生のお手伝い 朝寝番		
教科			体育科 「フラグフットボール」
特別活動	学校活動 「男子と女子、力を合わせて」		学校活動 「自分の役割って何だろう」
生活科 総合			
道徳科			道徳科 「いらなくなったきまわり」

第6学年 第2四半期キャリア教育関連表

育てたい資質・能力  
自己理解・自己管理能力  
目指す姿  
今までの様々な経験を生かしながら、計画を立てて、自己管理することができる

四半期の  
おわり

このように四半期ごとに実践をまとめ、構内に掲示して、共有しています。

The right side of the page features a detailed activity log for the 6th grade, 2nd semester. It includes photos of students participating in various activities like '男子と女子、力を合わせて' (Boys and girls, working together) and '自分の役割って何だろう' (What is my role?). Handwritten notes describe the activities and the students' learning experiences. A large yellow box at the bottom states: 'このように四半期ごとに実践をまとめ、構内に掲示して、共有しています。' (We summarize the activities every semester and display them in the school building for sharing.)



## 棚倉町立社川小学校での取組

### 学校の教育目標の設定及び 実現に向けた研究

- キャリア教育の視点から設定した教育目標「自立の気風（自ら学ぶ・共に学ぶ・真似て学ぶ）」をもとに、評価（各種調査結果）を活用してPDCAサイクルを回すシステム（評価から回すPDCAサイクル）を構築した。さらに、評価サイクルと学校運営協議会を連動させ、教育活動の実施に必要な人的・物的資源を効果的に組み合わせながら活用す

るカリキュラム・マネジメントに取り組み、児童の「きく力」（聞く・聴く・訊く）を高めた。

- 取組を幼小連携、小中連携に広げていく。



棚倉町立社川小学校令和5年度の取組

## 棚倉町立高野小学校での取組

### 学習の基盤となる資質・能力の 育成に向けた研究

- 少子化による課題を克服するためにICTを最大限に利用し、育てたい資質・能力と「情報活用能力」とを関連付けて育成し、ICTや地域の人的・物的資源の活用による「個別最適化」と「協働的な学び」の両立などを目指すカリキュラム・マネジメントの在り

方を明らかにした。

- 取組の負担を減らして質の向上を維持する。



棚倉町立高野小学校令和5年度の取組

## 棚倉町立棚倉小学校での取組

### 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の 育成に向けた研究

- 育てたい資質・能力を「ほめポイント」の四つの「化」（見える化、共有化、意識化、強化）と四半期ごとにPDCAサイクルを回して資質・能力を育成することを連動させて指導した。そして、「キャリア・パスポート」や学習計画表において「ほめポイント」を基に対話的な関わりを推進し、児童と教師、

家庭や地域との共有も進められた。

- 効果のあった手法を各教科の見方・考え方を育むためにも活用する。



棚倉町立棚倉小学校令和5年度の取組



# 信州大学

## 有識者からのコメント

**信州大学と県内の教育委員会、教育センター、学校が連携**して手引きと**研修プログラムの開発**に取り組んだ事例です。手引きは「理論編」と「演習編」の2部構成です。「演習編」は「考えよう」・「作ろう」・「行おう」の三つを柱に、学校の教育目標の具現、カリキュラムマップの作成、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善のポイントや参考事例をもってまとめられています。また、手引きは研修講座・研修プログラムの開発とセットになっています。長野市教育センターでは、手引きを活用した講義と実践校の報告とを連動させた演習を取り入れた講座を開設しています。さらに、大学での教職実践演習に学生と教師が手引きを活用しながら議論する場を設けています。**養成から研修まで**を取めた手引きです。 (天笠 茂)

## 手引きの概要

手引きは、集合研修・校内におけるOJT研修のどちらでも活用しやすいように、以下に示す目次のように3部構成にし、学校や教師の実態に合わせて学べるようにした。

### 1. 目次

#### I. カリキュラム・マネジメントのねらい

- 1 学校教育目標と教育課程の編成について
- 2 子供たちの資質・能力と教育課程の編成について
- 3 地域社会との連携による教育課程の編成とは

#### II. カリキュラム・マネジメント～三つの側面～

- 1 教科等横断的な視点からのアプローチ
- 2 教育活動におけるPDCAサイクルの確立からのアプローチ
- 3 人的・物的資源の効果的活用の観点からのアプローチ

#### III. 具体例で考えるカリキュラム・マネジメント

- 1 学校の教育目標の具現に向けて、全職員で取り組みのあり方を考えよう

- ① 学校教育目標の具現に向けて、必要人的・物的資源等を確認しよう
- ② グランドデザインを作ってみよう
- ③ 学校教育目標と学年経営・学級経営・教科運営との関係と、自らの関わりを確認しよう

#### 2 教育課程を考えよう（カリキュラムマップを作ろう）

- ① 「単元配列表」を作成しよう
- ② (1) 総合的な学習の時間（生活科）を中核として、教科等とのつながりを考える。  
(2) 情報活用能力の育成を中核として、教科等とのつながりを考える（小学校）  
(3) 情報活用能力の育成を中核として、教科等とのつながりを考える（中学校）
- ③ 「単元配列表」をシンプルにして、「どのようにつなぐか」を検討しよう。

#### 3 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行おう

- ① 「主体的な学び」を具体的にイメージしましょう。
- ② 「対話的な学び」を具体的にイメージしましょう。

- ③ 「深い学び」を具体的にイメージしましょう。
- ④ 授業分析から「主体的・対話的で深い学び」について考えよう。
- ⑤ 【事例紹介】地域素材を活用した教材開発（地域との連携や協働を含む）
- ⑥ 【事例紹介】多様な教育方法を活用し、教科間の関連を意識した授業設計（ICTの活用①）
- ⑦ 【事例紹介】多様な教育方法を活用し、教科間の関連を意識した授業設計（ICTの活用②）

内容のⅠとⅡは、理論的な内容の研修用に構成した。教師個々が具体を通してカリキュラム・マネジメントとは何かを考えられように、内容によってはチェックシート等を活用した話し合いなどの活動場面も組み込んだ。内容のⅢは、集合研修での活用を想定し、事例研究を通してカリキュラム・マネジメントの視点を意識化するための演習の手引きとして構成した。

## 2. 集合研修でのハンドブックの活用について

教職員個々のカリキュラム・マネジメントに関わる課題意識を明確にするためには、まず、Ⅰの4ページ「カリキュラム・マネジメントの自己評価にチャレンジ!」から始めることが有効である。

次に、3ページの自校の「グランドデザインをチェック」を行うことで、自分がどの程度学校運営と関わっているかを確認することができる。チェックした内容を基に、小グループで情報交換をすることで、自己のキャリアアップへの意欲化を図ることができる。

Ⅲの演習では、33ページのワーク1「学校教育目標の具現に向けて、必要な人的・物的資源等を確認しよう」に各校の様子を書き込み、小グループで情報交換し議論することを通して、学校運営は教職員全員で関わることの重

さを認識することができる。さらに、カリキュラム・マネジメントの視点に立つと、教育課程は教職員全員で地域社会と協力して創造していくことが基本だということに気付くことができる。

44ページ以降の事例については、授業者はどのような教育観に立ってこの実践を展開したのかを小グループで議論することで、「あの先生の授業だから」と授業者の特定性に帰属させてしまいがちな授業研究から、自己の実践にどのように結び付けていくかという継承性の学びへと授業研究の視点を転換するきっかけに活用することができる。

## 3. OJT 研修の場での活用について

ⅠとⅡの「理論編」については、独立行政法人教職員支援機構（NITS）の解説ビデオ等も活用しながら、教師各自が具体をイメージしながら学べるように構成してある。さらに、必要に応じて集合研修に参加した教師が校内研修会等で解説することで、カリキュラム・マネジメントの内容理解の促進を図ることができるように作業ページ等を織り込んだ。特にⅡの18ページ「育てたい力（資質・能力）を確認してみよう」等のワークシートを活用した演習を充実させることが、カリキュラム・マネジメントを意識するきっかけになる。

また、ICT活用については、Ⅲの38・39ページの情報活用能力の育成に関わるワークを、学年や教科単位での研修として行うことも効果的である。



OJT 型授業改善プログラム報告書

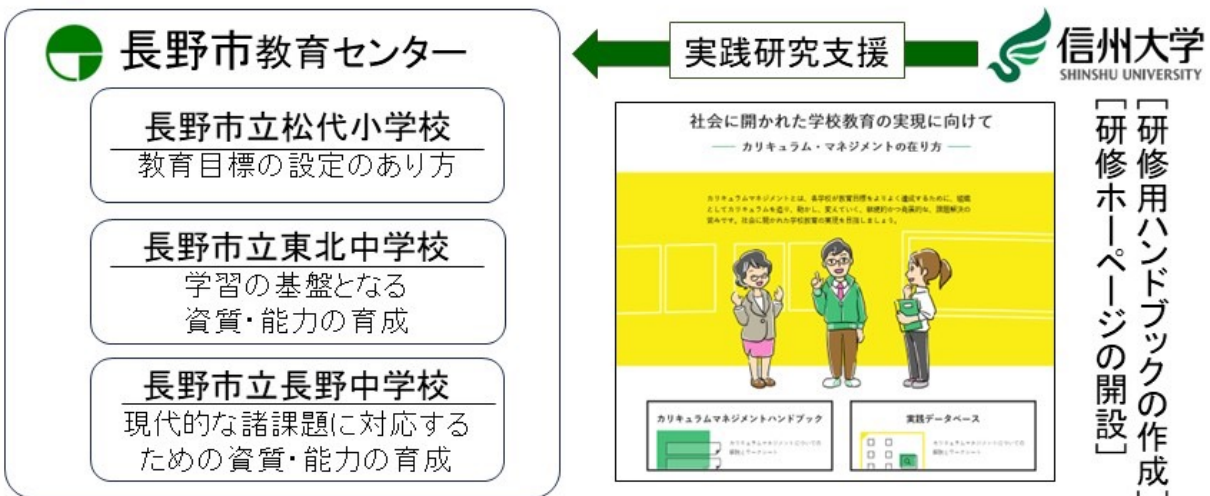
# 教科等横断的な授業の実践化に向けた 研修プログラムの開発

グランドデザイン OJT 研修 ICT 活用 教科等横断的な授業 地域素材

## 取組の目的

- ・カリキュラム・マネジメント能力の向上を目指し、OJT 研修用のハンドブックを作成する。

## 取組の概要



## 成果と課題

### <成果>

- グランドデザインは、日々の教育実践によるPDCAサイクルによって適宜変更していくことで、教育効果を上げていくものという意識が醸成され、全教職員で作り上げていくという意識変革ができた。
- 地域素材の教材化が充実し、教科学習と総合的な学習の時間との連動性も意識され、教育内容が充実したとともに、地域と学校との関わりも強化された。

### <課題>

- 校長の異動に伴い学校運営方針が大きく変わった際の教育実践の継続性と、新体制への移行が課題として見られた。
- 地域素材を活用した教育実践は、教師個人の資質・能力への依存度が高く、依然として個の業績に留まってしまう傾向が否めない。
- 教育課程の編成に当たって、依然として教科書の内容配列ベースの各教科の年間授業計画が主流で、総合的な学習の時間は独立した編成が行われている学校が多く、ハンドブックを活用したカリキュラム・マネジメントに関わる恒常的なOJT研修の充実が必要である。

【グランドデザインをチェック】

	学校全体での取り組みは？	私の取り組みは？
基礎学力の定着		
子どもたちの実態や地域の特徴を生かした学習		
主体的で協働的な深い学び		
個別最適な学び		
ICTを活用した学び		

- 3 -

自校の現状分析と課題把握

学校名	児童生徒数	教職員数	氏名
約	名	名	

1. SWOT分析

	内部環境	外部環境
グ ラ ン ド デ ザ イ ン		
マ イ ナ ス デ ザ イ ン		

2. 自校のよさや改善策

↓

- 47 -

カリキュラム・マネジメント構築型 学校名 作成者

本校の現状

育みたい資質・能力、目指す姿

具体的な取組

カリキュラム・マネジメント3つの観点から

教科書にない領域からのアプローチ  
「総合的な学習の時間」「教材」は手帳になるので、可能な限りこの枠組みで実行。

PDCAサイクルの構築から  
のアプローチ（特にPDCAの初期は重要）

人の・場の教育者（指導者の決  
定の最適性）の発想に基  
づくアプローチ

ここにあるように、作業を分け分けし、共有する仕組みを作ります。  
毎週必ずと決め、誰かが必ずやり、自由なレイアウトして  
更新してください。

その際、  
上記の3つは必ず行われなければならないこと  
が求められる点として留意してください。

- 48 -



# 京都市教育委員会

## 有識者からのコメント

前半の理論編、後半の3校（小学校、中学校、義務教育学校）の実践編ともに充実した内容です。3校とも、「**校内体制の見直し**」「年間計画の構築」「具体的な実践・検証の方法」「**児童生徒の変容の見取り**」を視点にしたマネジメントサイクルの手法」「**働き方改革**につなげる仕組みづくり」を明確にしながら、プロセスを重視した実践研究が進められました。令和元年度から2年度にかけての実践であるため、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けましたが、各校とも、学校の教育目標を共創し、チームとなって取り組み、成果を上げました。キーパーソンが果たした役割や動き、感想等も掲載されており、様々な立場からカリキュラム・マネジメントを考えることができます。各校で開発された資料も充実しています。じっくり読んでいただきたい手引きです。なお、京都市立葵小学校は令和4～5年度の独立行政法人教職員支援機構（NITS）の「カリキュラム・マネジメント研修」の事例発表を行いました。

（田村 知子）

## 手引きの概要

本市では、学習指導要領の趣旨の実現を図るため、平成30年度から、全市立小学校・中学校・義務教育学校でカリキュラム・マネジメントの確立に向けて、学校の教育目標における育成を目指す資質・能力の見直し、教科等横断の関連のある「単元配列表」の作成など、各学校において全教職員の共通理解の下、取組を進めている。令和元年度・令和2年度に文部科学省「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」の指定を受け、その成果物として作成した「カリキュラム・マネジメント実践報告書」は、研究指定校3校の実践研究や成果・課題等について、プロセスとその手順を大切にしながら、時系列にまとめた手引きとして、各学校のカリキュラム・マネジメントの更なる充実に資する目的で作成した。総論の後、3校の実践について右のような章立てで紹介し、知りたい情報がすぐに見付けられる構成とした。

### 1 はじめに

カリキュラム・マネジメントをどのように捉え、どの側面からアプローチしたか。カリキュラム・マネジメントを行う目的や意味。

### 2 課題の把握及び学校教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し

課題をどのように把握し、育成を目指す資質・能力を設定したか。見直しに当たっての困りや気づきとその解決方法。

### 3 学校体制の再構築

推進するための学校体制の工夫。全ての教職員が当事者意識をもつまでのプロセスやその取組等について。見直しに当たっての困りや気づきとその解決方法。キーパーソン（校長、教頭、教務主任等）が果たしたそれぞれの役割や動き。

### 4 カリキュラム・マネジメントの三つの視点を踏まえた実践の具体例

実践の具体例を三つの視点に分類して掲載。取り組む中で見えてきたもの。

**5 成果と課題**

2年間の取組の成果と課題。

**6 おわりに**

2年間のスケジュール等。

**7 編集後記的な自由記述**

キーパーソン（校長、教頭、教務主任等）による振り返り。

加えて、調査研究に際し、指導助言をいただいた有識者の方にも御協力いただき、カリキュラム・マネジメントの推進に当たったのポイントやこれからの学校運営に期待したいことについて御執筆いただいている。

具体的な実践事例を参照いただくことはもとより、カリキュラム・マネジメントの目的や意味を教職員間で今一度再考し、議論するきっかけにしていきたい。

## 京都市教育委員会による学校支援の取組

### ○ 調査・研究支援

検討会議を組織し指導・助言、実践3校交流会やカリキュラム・マネジメントアドバイザー（有識者）相談会の開催等。

### ○ カリキュラム・マネジメント全市研修会

令和元年度に全小・中学校の教務主任を対象に実施。研究指定校の実践発表及び首席指導主事による講義。

### ○ 本市全体へ研究成果の共有

手引きの作成及び本市の全小・中学校に配布。

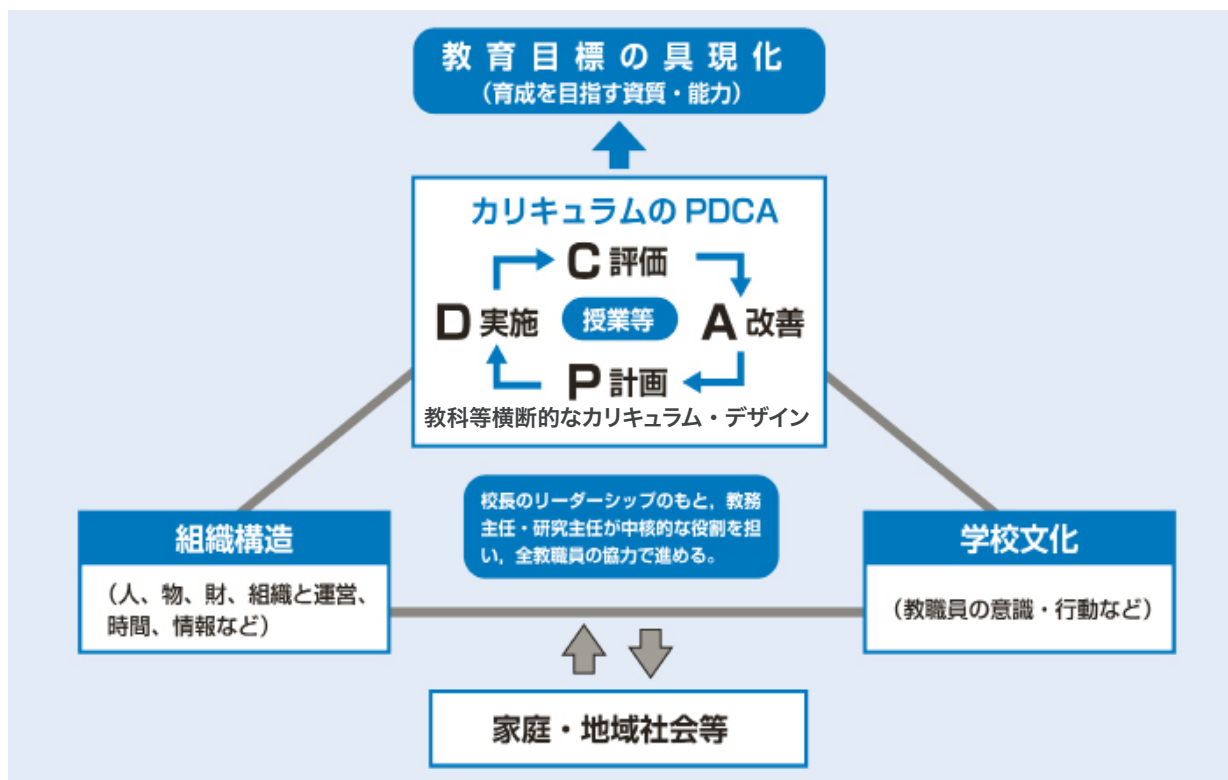
## 学校の教育目標の実現のための カリキュラム・マネジメント

学校の教育目標の見直し      学校体制の再構築

### 取組の目的

- ・学校の教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し。
- ・自律的・協働的な学校組織文化の構築、全ての教職員が当事者意識をもつ。

### 取組の概要



### 京都市立向島秀蓮小中学校での取組\*

#### 学校の教育目標（育成を目指す資質・能力）の見直し

学校の教育目標の設定にあたっては、具体的にどのような資質・能力を育成すればその目標を達成したと言えるのか、一丸となって取り組

むための共通イメージが必要である。そのため、「考える力」「発信する力」「コミュニケーション力」「自律的活動力」「多様性を受容する力」「折れない力」の六つを、育成を目指す資質・能力とし、学校の教育目標を具体化した。一年後、



現状把握を進め、課題の共有を行った後、全体に浸透した学校の教育目標とするために、全体で見直しに当たった。学校の教育目標達成に向け、様々な教育活動を行うことを全体で共有した。

### ＜成果＞

六つの資質・能力を育成することが、学校の教育目標の実現につながっているという意識が教職員の中に生まれ、自校の子供たちをどのよ

うに育てるかという俯瞰的な視点をもてるようになった。自分たちが設定した目標であると教職員が捉えることができ、その目標が自分たちの目指すべき旗印であるとの思いを強くすることができた。

\*手引きから京都市立向島秀蓮小中学校の取組を一部抜粋したものです。



京都市立向島秀蓮小中学校 HP

## 京都市立葵小学校での取組\*

### 自律的・協働的な学校組織文化の構築、 全ての教職員が当事者意識をもつ

学校の教育目標の具現化に向けて効果的に行動するために、集団としての意識と能力を継続的に高め、伸ばし続ける組織づくりを目指した。カリキュラム・マネジメントを学校改善の中核として位置付けるとともに、校内研修にも着目した。以前はそれぞれの係で動き、横のつながりが見えにくい状態であったが、ビジョンを全教職員で共有するとともに、学年会を中核にして取組を進めることとした。また、「対話の時間」という新たなカリキュラム作成を学校経営戦略に位置付け、対話的な学校組織風土の構築に取り組んだ。カリキュラム化に当たっては、教職員自らが真の対話を経験する必要があると考え、対話を核とした校内研修を開発した。

### ＜成果＞

週に一度の学年会を設定し、学習や行事の予定だけでなく、授業の仕方や児童の姿などを共有し、育成を目指す資質・能力をどのように伸ばしていくか、児童の力はどこまで伸びているかなどを共有するようにした。その際には、関連する「単元配列表」等を活用し計画と振り返りを連動させた。対話を核とした校内研修では、コミュニケーションの基盤となる、教職員が何を考え、どう行動したいと願っているかということが共有され、安心感につながり、信頼関係が生まれ、自分の思いを自然に伝え合える関係性が構築された。(表1参照)。

\*手引きから京都市立葵小学校の取組を一部抜粋したものです。



京都市立葵小学校 HP

表1：対話を核とした校内研修の主な内容

1年目	＜目指すゴール＞「対話の授業のカリキュラム作成」
第1回	職員室内で起きているリアルなテーマによる対話
第2回	ファシリテーションスキルに特化した研修
第3回	講師による対話の授業参観・事後研究会
2年目	＜目指すゴール＞「業務効率と教育の質の両立」
第1回	職員室内で起きているリアルなテーマによる対話
第2回	自分の判断軸を立てる
第3回	組織の判断軸を立てる
第4回	働き方を見直す



# 大阪府教育委員会

## 有識者からのコメント

大阪府教育委員会が作成した手引き（令和元・2年度版、令和3・4年度版）では府内の多くの調査研究実践校の成果を踏まえ、小学校や中学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進の**具体的な道筋**が示されています。とくに手引きの第1章に記載された「カリキュラム・マネジメント Q&A インデックス」では、カリキュラム・マネジメントを推進する**現場の教師の実感ベース**で、取組の個別的な内容（「単元配列表」の整理や地域人材の活用など）に対する疑問や効果などが丁寧に描かれています。各実践校の事例も、「**Why**」「**How**」「**Change**」の三つの視点から共通に整理されており、カリキュラム・マネジメントの推進の状況が端的に分かるようになっています。

（赤沢 早人）

## 手引きの概要

学習指導要領の確実な実施のためには、各学校においてカリキュラム・マネジメントの実現が不可欠である。そのため、令和元年度からの2年間、及び令和3年度からの2年間でそれぞれ「大阪府カリキュラム・マネジメント調査研究事業」として、カリキュラム・マネジメントの実現のために重視すべき観点ごとに項目を立て、調査研究校において実践研究を進めた。

各調査研究校における事例や参考資料等を、大阪府教育委員会が手引きとしてとりまとめた。教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、学校全体で組織的に取組を進めることを目指し、以下に示す構成で作成した。

なお、この手引きは、紙媒体では配付せず、府HP上にPDFデータで示すことにより、一人一台端末等を活用して、いつでもアクセスできるものとなるようにした。また、参考資料については、二次元コードを記載し、すぐにダウンロードできるようにしている。

手引きの編集に当たっては、各校が提出した原稿データを府教育庁担当者が手引き全体の統一感が出るようデザインした。

### 「カリキュラム・マネジメントの手引き」の構成

#### 第1章 カリキュラム・マネジメントを知ろう

カリキュラム・マネジメントを学校全体で組織的に進めるために、まず、その根拠や意義を理解しておく必要があると考え、学校にとって課題となっていること、必要とされていることが明確になるような構成にした。

#### ○カリキュラム・マネジメント Yes/No チャート

矢印に沿って読み進めると、読者が必要な情報にいち早く辿り着くことができるチャートを提示した。

#### ○カリキュラム・マネジメントあるある （令和3・4年度版）

令和4年度に実施した大阪府カリキュラム・マネジメント Web フォーラムにおいて、大阪教育大学の田村知子教授に作成いただいた資料を参考に作成した。「カリキュラム・マネジメントをしなければならない」や「カリキュラム・マネジメントは難しそう（分からない）」といったありがちな疑問に対して答えるページとして

作成した。

### ○“カリキュラム・マネジメント”って何だろう？

学習指導要領総則に示された定義や、カリキュラム・マネジメントの“三つの側面”、学校全体としての教育活動の質の向上や授業改善に向けたPDCAサイクルなど、カリキュラム・マネジメントの実現に向けて必要な基本的事項について解説した。

### ○カリキュラム・マネジメントQ&Aインデックス

調査研究校が実践を進めるに当たって、苦勞したことや実感したことについて、Q&A形式で作成した。Q&Aの中で触れられている取組内容の詳細について、第2章の該当する学校とリンクさせることにより、さらに理解が深まるような構成とした。

## 第2章 カリキュラム・マネジメントの実現に向けた実践事例とその工夫について

第2章では、カリキュラム・マネジメントの

“三つの側面”に沿って実践された取組を、調査研究校ごとにまとめ、読者が自校の実態や課題に合った取組の参考とすることを目指した。

各調査研究校のトップページには、「Whyなぜ取組を進める必要があったのか（実態・背景）」、「Howどのように取組を進めたか（取組の概要）」、「Changeどのように変容したか（学校・保護者・地域等）」の三つを箇条書きで示し、その学校でカリキュラム・マネジメントを進める必要性とその成果などを簡潔にまとめた。また、本文中では、市町教育委員会による調査研究校への支援についてもTopicsとして示している。

## 第3章 カリキュラム・マネジメントの実現のための参考資料集

第2章で紹介した各校の作成資料を、ジャンルごとに分類してダウンロードできるようにした。「計画(Plan)」、「授業(Do)」、「評価(Check)」、「情報共有・発信(Action)」に関する参考資料をそれぞれ項目ごとに掲載している。

## 大阪府教育委員会による学校支援の取組

### ○ カリキュラム・マネジメント検討会議の開催

年間2回（8月、10月）実施し、調査研究校の担当者及び市町教育委員会指導主事が参加して、各校の実践報告や手引きの活用、普及及び作成に向けた検討などを行った。

### ○ 学校訪問を通じた指導助言

### ○ Webフォーラムの開催

各調査研究校の令和3・4年度の取組についての実践発表及び大阪教育大学の田村知子教授との対談をWeb会議でリアルタイム配信し、後日、収録したものをオンデマンド配信し、広く府域に情報を共有した。

### ○ 大阪府カリキュラム・マネジメント調査研究事業

調査研究校（小学校3校、中学校1校）を指定し、府域全体で活用可能な事例となるように、令和2年度末に作成した手引きの内容をもとにした研究を進めた。

## 実践校における取組：忠岡町立東忠岡小学校

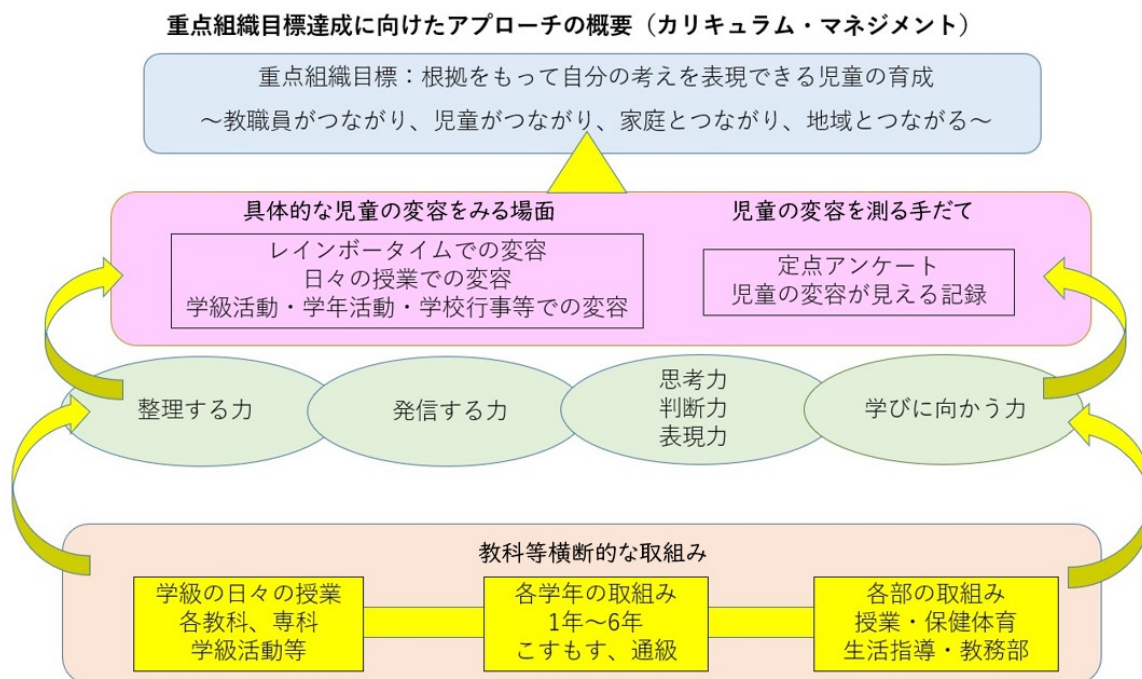
根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成  
～教職員がつながり、児童がつながり、  
家庭とつながり、地域とつながる～

年間計画の見直し 児童・教師の変容 ICTの活用  
縦割り活動 見える化 つながり

### 取組の目的

- ・ PDCA サイクルを通じた年間計画の見直し。
- ・ 学年、部会、教科を超えて授業や取組を系統的につなげる。

### 取組の概要



本校がカリキュラム・マネジメントに取り組んだ背景として、

1. 児童の表現する力が伸びない（全国学力・学習状況調査等による）。
2. これまで教職員がそれぞれの持ち場で取組を進めていたが、つながりを持ち、系統的に取り組む実践が少ない。
3. 一人一台端末をどのように使っていくのかを研究する必要がある。



これら3点の改善を図る必要があった。そのためにカリキュラム・マネジメントに学校全体

で取り組み、児童の課題に正対していきたいと考えた。

令和3年度の代表的な取組として、職員室後ろの掲示板に、ICTを活用してよかった点などを書き出して、いつでも誰でも、付箋紙に記入して貼れるように「ICT活用掲示板」を設置した（前項写真）。

令和3年度の取組の反省として、

1. 教科、部、学年をつなげる取組を日々の授業にいかに関与させるか。
2. PDCAサイクルのCAに係る時間をいかに効果的に作ることができるか。

という課題が浮かび上がった。

そこで、目標達成に向けて、アプローチの方法や、取組内容、つながりについて令和4年度の取組内容を見直した。まずは、年間計画を見直すことから始め、以下のように取組を改善した。

令和4年度の主な取組(具体的な内容は後述)

- ・学年別「まなびプラン」の設定・公開
- ・取組報告の共有「まなびレポート」の見える化  
各学年の取組を、教職員や児童、保護者等へ共有・発信できるよう、「まなびボード」を設置し、そこへ各月の取組「まなびレポート」を掲示し紹介した。
- ・縦割り活動「レインボータイム」の設置  
クリーン大作戦や音楽会、運動会等、レインボー班で学校行事などの特別活動に位置付けて活動を進めた。
- ・校内研究授業と事後検討会の活性化
- ・家庭学習チャレンジ週間を通じた家庭との情報交流 など

## 成果と課題

### <成果>

この2年間の取組の成果としては、まず、「つながり」をテーマに取組を進めた結果、児童同士が同学年・異学年を問わずつながりをもてる場面を増やすことができた。学級内でも、ペアやグループ等のつながりを深める点を意識することができた。

また、情報共有の在り方を工夫することで、教職員の指導の方向性を一致させ、経験年数を問わず同じ方向を向いた指導が可能になった。さらに、児童が表現できる場を増やしたことも成果の一つと言える。

### <課題>

この研究を通して、「児童が安心して表現できる集団づくり」ができていたかという点が、反省点として挙げられた。

解決するための手立てとしては、

1. 自己肯定感と自己有用感を育む方法の工夫。
  2. 互いに認め合い、支え合える集団づくりの改善。
  3. 自己決定の場を提供する授業づくりの継続。
  4. 安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業改善。
- の4点が挙げられる。

今回、これらの取組の実践を進めたことで、カリキュラムを俯瞰的に見直すきっかけとなった。そして、全ての教育活動はつながっているということ、そのつながりの中で、全ての児童に関わっていくことが大切であるということをも全教職員で再認識することができた。

## (1) 学年別「まなびプラン」の設定・公開、 取組報告の共有「まなびレポート」の見える化

1年間をⅠ～Ⅳ期に分けた、各学年による「まなびプラン」シートを作成した。なるべく短いスパンでPDCAサイクルを実施し、端的に評価してすぐ次の実践へつなげていくというサイクルを定着させた。全学年の「まなびプラン」は校内の共有フォルダでいつでも見ることができるようになっている。長期休暇には全学年や各部会から集まった「まなびプラン」をもとに教職員全体で検討・協議する機会も設け、今後の見通しをもつための教職員間交流は大変有効であった。

また、各学年の取組を、教職員や児童、保護者等へ共有・発信できるよう、「まなびボード」を設置し、そこへ各月の取組「まなびレポート」を掲示し紹介した。普段授業を相互参観するゆとりがもてないが他学年の取組には興味があり、情報を交流したいと考える教職員にとってだけではなく、参観や懇談等の行事の際における保護者・地域への情報発信ツールとしても有効であった。学校・家庭・地域それぞれの「つながり」を意識するためにも意味があったと考えられる。

## (2) 縦割り活動「レインボータイム」の設置

令和4年度より生活指導部主導による「レインボータイム」という縦割り班での活動を取り入れた。学級のみでは人間関係も役割も固定され、活躍の場も限定されてしまうが、縦割り班での少人数組織では、一人一人が大きな役割を担い、協力して活動することが不可欠となる。それぞれが主体となって「伝え合う」、「つながり合う」取組を設定することで、高学年はリーダーとしての役割を意識する。また、本校の研究テーマである「根拠をもって自分の考えを表現できる児童の育成」の取組として、表現力を

伸ばす面でもお手本となる効果が期待された。児童が多くの教師とつながり、新たな側面を発見し力を伸ばす試みとして効果が見られている。

クリーン大作戦や音楽会、運動会等、レインボー班で学校行事等の特別活動に位置付けて活動を進めた。立案には、生活指導部だけでなく、教務部や保健体育部など複数の部会も関わっており、教職員同士のつながりを生む場ともなっている。



大阪府忠岡町立東忠岡小学校 HP

## 実践校における取組：田尻町立中学校

## SDGs TO TAJIRI 学校 × 地域・役場連携

地域との連携	教育委員会による支援	SDGs
社会に開かれた教育課程	社会的実践力	課題解決型の学習

## 取組の目的

- ・ 逆境力（壁にぶつかったとき、自分の力や他者と協力しながら乗り越えられる力）の育成。
- ・ 社会的実践力（義務教育を終え、社会に出たときに生きて働く力）の育成。

## 取組の概要



田尻町は保育所、幼稚園（令和5年度からこども園）、小学校、中学校が1か所ずつという環境にあり、子供たちは限定的かつ閉鎖的な人間関係の中で義務教育修了までを過ごすことになる。そういった環境も相まって子供たちは、初めての場所や相手といった環境に置かれると自分の考えや意見を伝えられないといった消極

的・受動的な姿勢がよく見られた。そういった実態から、探究学習を充実させ、付けたい力を逆境力・社会的実践力とし教職員全体で共有を図った。

これまでキャリア教育の一環で職業体験を行ってきたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から中止となったことを受

け、新たな取組を模索する中で、SDGsの学習を行い全17の目標ごとに探究したいグループを構成し、役場の各課と連携しながら田尻町の課題解決に取り組むことで、身近な仕事や働く人と関わることができ、キャリア教育にもつながると考えたことがきっかけである。

また、令和2年度から取り組んでいるSDGsの学習を総合的な学習の時間の中心的な取組として位置付けカリキュラム・マネジメントを行うこととした。生徒に付けたい力を教職員全体で共有し、教科等横断的な視点で授業改善を図った。

中学生が、地域や役場の各課と意見を交流し、SDGsの観点から田尻町が抱える現代的な諸課題について、

1. 自分たちに今、何ができるか。
  2. 学校全体で何ができるか。
  3. 地域・役場と連携・協力して何ができるか。
- という三つの視点で解決に向けて、企画・立案・提案し、実践していった。

その際、子供たちが他者と協働しながら取組を進められるよう、町教育委員会の指導主事が、課題解決に適した役場の課や地域人材を紹介したり、町HP等で広報活動をしたりするなどのコーディネートを行った。

## 成果と課題

2年間、カリキュラム・マネジメントに携わってみて、これまでになかった田尻町のよさや強み、「田尻町立中学校ならでは」のよさが発見できた。

カリキュラム・マネジメントを進めるには、主担当者を校務分掌に配置することが効果的であり、主担当者を中心に、PDCAサイクルを回し続ける、動き続けることが大切であると分かった。生徒も、教職員も、地域をも巻き込んで、PDCAサイクルを意識することで、生徒の“町に対する想い”を実現していくプロセスの中で、様々な経験ができ、それが次の課題解決、次の取組へとつながっていった。

「生徒のために私たち教職員、地域の一員として、何ができるのか」「生徒にどんな力を付けさせたいか」それを常に考え、実現するために、学校が教育委員会や地域とつながることは、まさに社会に開かれた教育課程の実現と言えるのではないか。

(生徒の感想より)

- ・SDGsの学習を通して、課題の解決や目標達成のためにいろいろと工夫しながら積極的に挑戦していくことで「やりぬく力」が付いたと思う。

(教師の感想より)

- ・総合的な学習の時間を中心に、子供のアイデアを尊重し、子供主体の授業づくりを意識していけるようになった。
- ・(役場や地域の方が)教職員とは別の立場として、生徒と向き合ってくれることが子供の成長につながった。



## (1) 総合的な学習の時間を核とした

### 教科等横断的な視点での

### カリキュラム・マネジメント

生徒に付きたい力について、総合的な学習の時間のみで育成を目指すのではなく、それぞれの教科担当教師が教科の見方・考え方を働かせながら、各教科の学習と総合的な学習の時間の取組のつながりを意識した。生徒が取り組みたいテーマについてプレゼンテーションをし、各教科の担当教師が、それぞれの教科の見方・考え方をもとに、コメントやアドバイスをした。生徒は、教師からのアドバイスを受けて、その後の活動の計画につなげることができた。

## (2) 課題設定・企画の実現から生まれた

### 好循環のサイクル

#### <課題の設定>

SDGsのグローバルな目標から田尻町の課題に焦点化し、子供たちが感じる田尻町の課題を各グループが設定した。

#### <企画・提案>

各グループで「1. 自分たちに今、何ができるか」、「2. 学校全体で何ができるか」、「3. 地域・役場と連携・協力して何ができるか」という視点から解決策を連携する方々に提案する。

#### <実現>

解決策を提案して終わるのではなく、実際に行動していくことが重要であると考え、各グループが実現に向けて行動に移していった。自分たちの想いが現実のこととなるという成就感から、地域社会づくりに向けて主体的に社会参画することができた。

生徒が学習を進める上で、これまで地域の方々から温かく見守られてきたという想いが根底にある。それを起点に、自分たちに何かできることはないかという発想に至り、役場や地域

の方と協力しながら、企画・提案を繰り返すことで実現することができている。それが大きな達成感を生み、新たな想いが育まれるという好循環のサイクル（前項の取組の概要を参照）を生み出すことができた。

## (3) 町教育委員会による支援

### ～子供たちの課題意識から

### 学校と役場・地域をつなげる～

子供たちが他者と協働しながら取組を進められるよう、町教育委員会の指導主事が、課題解決に適した役場の課や地域人材を紹介し、より活発に議論ができるようコーディネートを行った。

生徒に付きたい力・目指す子供像を地域へ発信・共有することで、地域を巻き込んで取組を進める意義を理解してもらった。教職員と役場・地域の方とのミーティングを企画し、またHPや町広報誌で今回の取組の進捗や成果を随時発信するようにした。



大阪府田尻町立中学校  
HP



広報 たじり  
2022年11月号  
p.12に掲載



# 大阪教育大学

## 有識者からのコメント

本手引きの特長は、**附属学校と大学の研究者の連携**によってまとめられたところにあります。

第1章では、**カリキュラム・マネジメントの基本理論やコンセプト**について研究者により解説されており（例：複数のマネジメントサイクルの紹介と省察の重要性など）、カリキュラム・マネジメントの理解や推進の手掛かりとなります。第2章では、大阪教育大学附属天王寺小学校（STEAM教育）、大阪教育大学附属天王寺中学校（探究活動）、大阪教育大学附属池田小学校（安全教育）の実践について、**研究者によるカリキュラム・マネジメントの視点からの分析**等を添えて特徴や課題がまとめられています。第3章では、3校の実践に関連する理論や事例が紹介されています。本手引きは、学校のカリキュラム・マネジメント推進への研究者の関わり方についての示唆を含むものでもあります。

（吉富 芳正）

## 手引きの概要

大阪教育大学には3地区のキャンパスに11校園の附属学校があり、新たな教育とカリキュラム開発にチャレンジし、実践を可能とするために、様々な取組を行っている。その取組の工夫をカリキュラム・マネジメントの視点で取り上げ、一般化できないかというのが本研究に取り組むことになった動機である。本学に研究組織を立ち上げ、研究対象として天王寺地区の附属天王寺小学校と附属天王寺中学校、池田地区の附属池田小学校を選び、それぞれの地区に学校の実践を研究する地区研究委員会を設置し、附属学校と大学の研究者が密に連携する仕組みを構築した。各地区委員会の研究成果をまとめたものが本手引きである。

本手引きは、次のようなニーズに応えた内容となる。

- ・ 新しい「〇〇教育」のカリキュラム開発を目指す学校関係者
- ・ 働き方改革を目指す学校管理職
- ・ カリキュラム・マネジメントを牽引する主幹教諭・教務主任・研究主任
- ・ 授業改善を期する全ての教職員
- ・ カリキュラム・マネジメントの実態を知りたい

たい大学生・大学院生

- ・ 教職大学院におけるカリキュラム・マネジメントの授業担当者

手引きは以下のような構成となっている。

### 第1部 カリキュラム・マネジメントにおける基本理論とコンセプト

手引きで紹介する事例やその考察などの基本概念となるカリキュラム・マネジメントを学校全体で組織的に動かす意義、考え方、方法論を紹介した。マネジメントサイクルにおける省察、組織体制・学校文化づくりとリーダーシップ、リソースの調達・活用とタイムマネジメント等が該当する。

### 第2部 実践・解説編（基本理念とコンセプトを活用した実践事例の特徴と課題）

附属学校3校の取組について、カリキュラム・マネジメントの観点から問い直し客観的な評価を試みることで、新たな価値を発見するとともに、そのプロセスを可視化することを目指しまとめた。カリキュラム・マネジメントが有効に働く要因を検証した。次項に各校の特徴を示す。

### 大阪教育大学附属天王寺小学校

STEAM教育のカリキュラム開発に取り組み、「教科」を対象とした教師の個人研究から、「教科等横断的」な実践を対象とした組織研究へと変容させるために、組織構造や学校文化の見直しに着手し、マネジメントサイクルを循環させるための条件整備を展開した点に着目した。

### 大阪教育大学附属池田小学校

教育課程特例校の指定を受けた特別な教育課程である「安全科」を設け、全学年を対象に安全教育プログラムを構築・実践している。当時は各学年年間35時間実施され、教科内容との重複が課題であったが、15～16時間程度に指導時間を厳選し学習内容を充実させた。

### 大阪教育大学附属天王寺中学校

生徒が主体的な探究活動を行う「自由研究」に長年取り組んできた。生徒は通年に近い形でゼミに所属し、指導教師の個別指導を受けながら探究する。その歴史は長く、現在に至るまで幾度となくカリキュラムの見直しがなされてきた。カリキュラム改善の重要な手法であるカリキュラム評価に迫る。

## 第3部 カリキュラム・マネジメントで

### 活用した理論と先行事例

手引きで紹介する事例を始めとして、カリキュラム・マネジメントの視点から考える学校と地域の連携・協働の在り方等、有用な理論と先行事例を紹介した。

第2部の実践・解説編では、文部科学省が提唱するカリキュラム・マネジメントの三つの側面（①教科等横断、②PDCAサイクル、③リソースの活用）に加えて、「各学校の教育課程に基づき教育活動の質の向上を図ること」「全教職員で組織的に学校の教育目標の実現を目指すこと」の5点において、実践事例を読み解く着目点を解説している。本手引きは200ページを超えるが、目次をクリックすることで、知りたい情報の該当ページに移動することができる。

附属学校は、管理職（副校長）によるガバナンスを効かせたトップダウンと、中規模校というスケールメリットを生かした教師からのボトムアップのバランスが取り易く、結果としてカリキュラム・マネジメントが円滑に遂行できたと考える。加えて、教務主任や研究主任といったミドルリーダーがその役割を果たしたこと及びカリキュラム・マネジメントを分掌として実行・評価する何らかの組織が存在していたことが、有機的な取組を可能にしたと推測する。本研究では、実践家（附属学校）と研究者（大学）で構成されたカリキュラム・マネジメント研究会のメンバーが問題意識を共有するとともに、複数の研究者が随時附属学校を訪問して調査研究活動に参画した。理論的な背景に基づき児童・生徒・教師の姿を確認しつつ、カリキュラム・マネジメントの方向性について継続的に協議する機会を設けたことが重要な意味をもつことになった。

現場の先生方を始めとする教育関係者が、様々な教育課題に立ち向かう際に、本手引きが役立つことを切に願っている。そして何より、未来を創る子供たちが、真に幸福と感ずることが出来る社会に向けての一助となることを期待している。

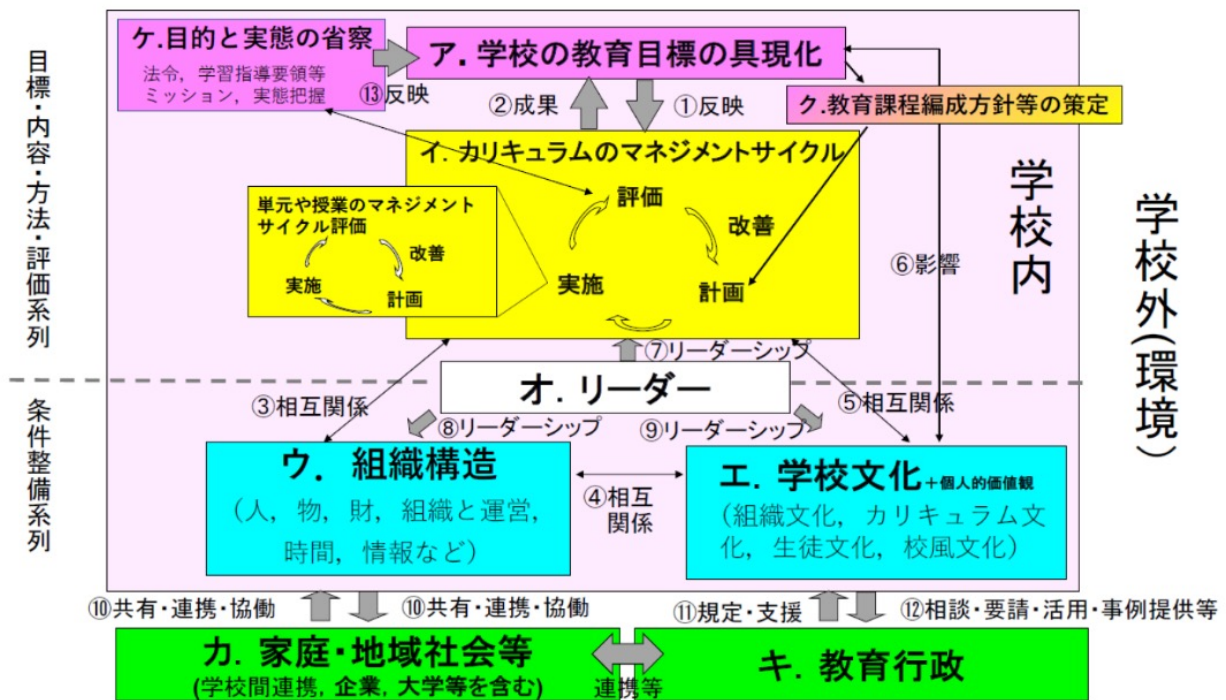
# マネジメントサイクルの確立と条件環境整備を一体的に捉えたカリキュラム・マネジメント

評価における子供の参画 研究者の参画  
協働的な組織文化の醸成

## 取組の目的

- ・カリキュラム評価を核としたマネジメントサイクルの確立。
- ・マネジメントサイクルの確立と条件環境整の一体化。

## 取組の概要



田村知子 (2022) カリキュラムマネジメント・モデル

## 大阪教育大学附属天王寺小学校での取組

### ～マネジメントサイクルの確立と条件環境整の一体化

一般にカリキュラム・マネジメントという言葉が浸透しつつあるものの、学校現場では、教育課程の評価、改善に終始している傾向が散見される。学校の教育目標の具現化に向かうためのカリキュラム策定には、どのような組織構造

や学校文化が求められるのかを要素として捉えないと、マネジメントサイクルは好循環しないのである。組織構造の改革を学校文化の醸成につなげ、カリキュラムのマネジメントサイクルの確立と STEAM 教育を推進することができる条件環境整備を一体的に捉えたところに特徴が

ある。「教職員一人一人が学校全体の教育活動に関しての主体者となる」ように校内研究組織の再編を行った。また、働き方改革とともに、職員室内の協働ワークスペースづくりを始めとする教職員の協働性を高める環境整備に努めながら、伝統的な教科教育における個業的な研究体制から、協働的な研究へと着手したのである。

### <成果と課題>

「単元配列表」を拡大して職員室等に掲示し、単元終了時等すぐに気づき等を加筆することで、その記述を見た教職員が、当該学年チーム

に声を掛け、真意を確認したり、課題解決策を検討したりするコミュニケーションが自然的に発生した。つまりカリキュラム評価会議を待たずして、対話体験を重ねながらカリキュラムの見直しが随時展開されるなど、協働性が高まった。



大阪教育大学附属天王寺小学校の取組

## 大阪教育大学附属天王寺中学校での取組

### ～評価を核としたマネジメントサイクルの確立

マネジメントサイクルの確立に、カリキュラム評価を工夫したのが天王寺中学校である。従来、生徒は3年間で三つの研究を行っていたが、教職員がカリキュラム評価をした結果、3年間で一つの研究を深める活動へと改善された。長期にわたる探究を実践することを通して、生徒は何を学びとして認識し、あるいは困難を抱いていたのか等について生徒の自己評価の実態を評価材料としたところは特徴的である。学んだことの共通点として、①自分の生活から立ち上がった疑問を主体的に探究し、課題を解決することの大切さと、それに伴う自律的態度の獲得、②研究内容を聞き手が納得するように伝えるための論理的表現力の重要性、③継続的な探究活動によって疑問を解明する面白さと課題解決能力に関する自覚、④協働的活動に関する重要性の自覚等が示された。また、カリキュラム評価において大学研究者を招聘し、生徒への質的研究によるカリキュラム評価を行った。

### <成果と課題>

様々な角度からの評価が信頼性を高め、評価を核としたマネジメントサイクルを、改善のみならず、今後のよりよい取組へと発展していくことが可能となる。また、大学研究者による調査分析により、自由研究をさらに発展させること、あるいはこのような探究活動を様々な学校へ広げていくために、本自由研究実践の課題とそれに対する提言をまとめた。例えば2割近くの低満足度群に属する生徒への支援方略の必要性を明らかにし、その支援策として、何を行って、その結果何に気づき、何を見つけたのか、探究活動における成果の可視化を提案している。



大阪教育大学附属天王寺中学校の取組